

第1講：世界を動かした二つの銀帝国@ギャラリーよみうり/2015. 7. 26

石見銀山開発とグローバル化

仲野義文 (石見銀山資料館)

I. なぜ16世紀なのか？

i. 国内の銀山開発

『日本書紀』天武天皇3年(675)3月7日条に「天武天皇三年三月、庚戌朔丙辰、対馬国守忍海造大国言、銀始出于当国、即貢上、由是大国授小錦下位、凡銀有銀倭国初出于此時」とあり、対馬にて産銀に関する記述あり。

※古代において対馬が国内唯一の産銀地

対外貿易の主役

古代・中世…金(奥州)、硫黄(九州)

中世前期…銅(播磨・但馬・備中・備後など)

※対外貿易には銀は登場しない

ii. 大航海時代と銀山開発

15世紀末、イベリア半島のスペイン、ポルトガルでは大洋に進出し、1492年にはコロンブスがバハマ諸島に到着、1498年バスコ・ダ・ガマがインド航路発見をした。これにより「世界の一体化」が進み、世界規模での交易が拡大した。→ **国際通貨としての銀の需要が高まる**

ポトシ銀山(1545年)、サカテカス銀山(1546年)、グアナファト銀山(1548年)

日本における銀山開発も世界的な銀ブームの文脈で考えることが必要！

iii. 石見銀山開発の背景—東アジアの銀需要—

明朝中国

16世紀、中国では「銀経済の時代」を迎える

*貨幣政策上の問題

元朝末の紙幣によるインフレの影響、銅銭や鑄造原料の銅資源の不足→現物納を基本とした租税体系
一方貨幣制度は銅銭を本位。太祖洪武帝(朱元璋)は、1361年、銅銭鑄造のため首都南京に宝源局を、翌年各行省に宝泉局を設置し、洪武通宝を鑄造。ただし、1368年の鑄造高は8900万文、その後2億文程度が鑄造→北宋時代の5分の1)→その結果、市中の銭不足、私鑄銭が横行し、1375年に「大明通行宝鈔」を発行

※兌換準備銀の不足による不換紙幣化→市場信用を不得

※公定相場は鈔1貫に対し銭1000文、銀1両、米1石であったが、1369-70年には鈔1貫に銭160文にまで下落、さらに1407年に至っては米で30分の1、銀では80分の1まで暴落

経済的に豊かな江南地方では、鈔の暴落を期に銀に対する需要が進む→江南地方では他地域に先行して早くも1436年以降、田賦の一部が折銀、すなわち銀納化が実施(金花銀)。

※税糧4石につき銀1両、年銀1,000万余両を定額、北京に送り内承運庫に収納、武臣の俸禄や宮中経費に充当。1442年には太倉庫が設置、国家による銀の収取・管理体制が強化

***北虜南倭**

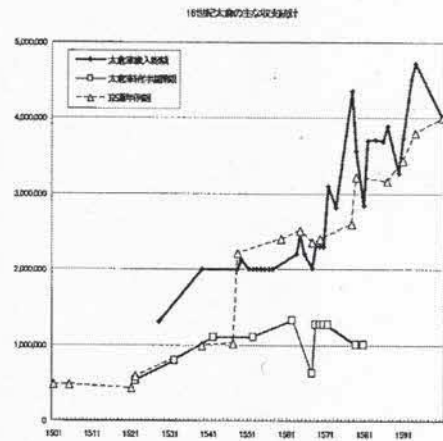
漢民族の王朝として成立した明王朝は、建国以来タタール(韃靼)やオイラート(瓦剌)などのモンゴル民族、東北部の女真族といった北方の遊牧民族による侵攻に苦慮

北方民族の対策→万里の長城を整備、九辺鎮なる軍隊を配置して防備

軍隊を維持→軍屯、民運糧、塩法をおもな軍糧の調達手段とし、米穀などの現物納を基本

※民運糧は、華北諸省の農民が自ら生産した米穀を直接北辺に運輸。ただ広大な領土をもつ中国の場合、軍糧の運搬にかかる負担は過酷→山西平陽府から大同鎮への輸送距離は「道路一千里」と比喻

正統年間に輸送負担の軽減のため、従来穀物の直納から銀代納へと変わる→**銀需要の増大**



II. 石見銀山の開発と展開

i. 発見譚にみる開発の背景

大永6年(1526)、大内義興が石見国守護のとき、筑前国博多商人神屋寿禎が出雲国鷲銅山に銅を買付に行く途中、日本海の沖より南山が光り輝くのを見つけ石見銀山を発見

【史料1】『石見銀山旧記』山中家文書

大永中に大内之介義興、当国を領有する時、筑前博多に神谷寿亭と云うものあり。雲州へ行かんとて、一つの船に乗り石見国の海を渡る。はるか南山を望むに嚇然なる光有り。寿亭船子に南山のあかるくあきらかなる光あるは何故やと、問いければ、船郎答えて申すけるは、是は石見の銀峰山なりと語り伝う。

※大内氏と神屋氏との人的な繋がりを示唆的に表現 → **日明貿易をめぐる人的結合**

***大内義興**

大内氏は、周防国山口に本拠を置く守護大名

百済の琳聖太子の後裔と主張し、朝鮮との積極的な貿易を展開

宝徳3年(1451)から日明貿易にも参画

永正13年、足利義稹の將軍職復歸の功績によって遣明船派遣にかかわる永久的な管掌権が認められる

大永3(1523)、「寧波の乱」で細川氏を打ち破る → 以降日明貿易は大内氏による独占状態

※日明貿易を通じて神屋家と深い関係

***神屋寿禎**

博多商人の神屋家の一族で実在する人物で、近年佐伯弘次氏によりその実像が明らかにされた

寿禎に関する史料は少ない → 「策彦入明記」初渡集に以下のごとく見出

- 天文 7年12月28日 統上司公老親壽禎。恵以山芋・午房並酒兩瓶。
- 同 8年 1月 6日 壽禎來臨。携以扇子。
- 同 2月 4日 神屋壽禎設齋。蓋統公司北堂之父春叟元仲三十三白忌辰也。
- 天文10年 7月 3日 午時。博多船來。神屋壽禎恵以斗合式ヶ。初喫博多酒。
- 同 7月13日 神屋壽禎恵大斗合一ヶ並茄子一盆。
- 同 7月21日 天目墨台一ヶ・大通庵。同一ヶ・玉雲。同一ヶ・神屋壽禎。

第18次遣明船の出航にあたって博多に滞在中の天竜寺妙智院策彦周良を訪ね贈物をする

統上司公=博多・聖福寺龍華庵主三正統上司 → 神屋寿禎は彼の老親

統公司北堂之父春叟元仲=三正の母方の父親が春叟元仲、寿禎の妻は春叟元仲の娘

天文21年(1552)10月22日に七回忌が実施 → 没年が天文15年(1546)10月22日
神屋主計家とは別系統

ii. 灰吹法の伝播

天文2(1533)年、神屋寿禎は博多より宗丹・慶寿を招き、灰吹法を導入する。これにより採鉱から製錬に至る一貫した生産システムが確立され、大量の銀が生産されるようになる。

【史料2】『石見銀山旧記』山中家文書

此年寿亭博多より宗丹・桂寿と云うものを伴ひ来り、八月五日相談し鏈(銀と石と相雜ものを鏈と云)を吹熔し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也

※ただし、灰吹法伝播にかかわる一次史料はない→記述の信憑性に問題

『中宗実録』には灰吹法伝播に関する記述が散見。たとえば、1539年には「伝于政院曰、柳緒宗多有所失、故不計殞命、期於得情刑訊可也、但倭人交通、多買鉛鉄、吹鍊作銀、使倭人伝習其術事」(中宗34年8月19日)とあり、地方役人柳緒宗が倭人から鉛鉄石を買って銀を製錬し、さらにその技術を倭人に伝習せしめた罪で処罰されたことが見える。同様に、1542年には「憲府啓曰、倭奴売銀買始於近年、縁我国奸細之徒潜教造銀之法」(中宗37年4月)と、倭人に「造銀の法」を教えたとある。

【史料3】『燕山日記』巻49、燕山君9年(1503)5月(『李朝實録』第十九冊、学習院東洋文化研究所、1976年)

良人金甘仏・掌隸院奴金俊同、以鉛鉄鍊銀、以進曰、鉛一斤鍊得銀二錢。鉛是我国所産、銀可足用。其鍊造之法、於水鉄鑪鍋内、用猛灰作冑、片截鉛鉄填其中、因以破陶器四冑覆之、熾炭上下以鑪之、伝曰、其試之

※1503年5月の記事によると、端川鉱山では灰吹法に際して鉄鍋を使用したことがみえる → 石見銀山遺跡出土の鉄鍋との共通性が指摘

トピック

日本における水銀精錬法

慶長12、3年(1607-8)頃、石見・佐渡・伊豆の金銀山で「水金ながし」に関する記述がある

*佐渡川上家文書

一、床屋御問吹、吹立念ヲ入申付候、殊ニ水銀なかし(過分ニ)勘定いたし見申所ニ、過分ノ御徳まいり候間、本ノ床屋ヲやめ、水銀床やかいふ口木立ノ上ニ立申候、わきノ衆もこれを承、皆々水銀床屋ニ可致候由申候て伊セノ與右衛門宗徳などハ、はやなかし申候事

*年末詳三月六日付「大久保石見守覚」石見・長野家文書

(諸)口屋ふきや水かねなかし無(油)断見廻候而様子可申付事

【史料4】村上直次郎訳『ドン・ロドリゴ日本見聞録』附録

一、殿下が前記ドン・ロドリゴに交渉せられてるイスパニヤの鉱夫を渡来せしめ、国内に産する多額の銀を精錬せしむる件は、実現上困難あれども、次の条件の下に主君ドン・フェリペ王に対し、百人又は二百人の鉱夫を派遣することを奏請すべし。

未だ発見開発せられたることなく、イスパニヤ人の知識と努力に依りて発見せる鉱山に付きては、精錬せる銀の半額を鉱夫の分とし、他の半額を二分し、其一は日本皇帝殿下の分、一は主君ドン・フェリペ王の

分とする事。又既に採掘に着手せる鉱山に付きては、其所有者とイスパニヤ人との間に新に契約を結ぶ事。而して若し必要がある時は水銀を持渡り、当地に於て正当代価の支払を受け、之を金鉱の精錬に用ふる事。

※家康はドン・ロドリゴを通じてイスパニヤの鉱夫を招聘→水銀精錬法の導入が狙いか?

水銀精錬法はこの期間を以外には見られない⇒灰吹法は前近代を通じて日本主流的技術

iii. 日本銀の流出とその影響

銀生産の拡大によって、日本から大量の銀が朝鮮・中国に輸出されるようになる。1540年には「倭銀流布充初市塵、赴京之人公然馱載一人所賣不下三千兩」(中宗 35 年 7 月)とあり、続く 1542 年には「倭国造銀未及十年流布我国已為賤物」(中宗 37 年閏 5 月)と、大量の銀が朝鮮に流入したことが見える。さらに、同年日本国王使僧と名乗る安心東堂が、銀 8 万両 (3.2 トン) を持ち込んで貿易を要求

※安心東堂は対馬の西山寺住持。臨濟宗幻住派に属し、聖福寺と関係が深い。

日本銀が倭人等によって東アジアにもたらされる一方で、外国からも日本銀を求めて活発な交易活動が行われるようになる。多くは中国南部の福建省などの商人で、彼らの中には暴風雨にあつて朝鮮に漂着する者も出現。

【史料 5】『中宗実録』巻 103、中宗 39 年 (1544) 6 月 (『李朝實録』第廿四冊、学習院東洋文化研究所、1977 年)

壬辰、政院啓曰、今推唐人言語不一至、為奸詐、初問居処、或曰河間、或曰福建、問福建有何物、則曰有某山、即取大明一統志考之、則果有之、又問、因何事到来、則答曰、以質銀事往日本、為風所漂而至此

iv. 倭寇の状況

石見銀山の開発を契機に、16 世紀半ば日本から怒濤の如く銀が流入したことで、環シナ海域における人とモノとの交流が活発化し、地域全体が未曾有の規模の社会的な大変動となつていった。こうした当該期における時代状況を、荒野泰典氏は「倭寇の状況」と呼ぶ。さらに、このような状況の中に、ヨーロッパから新たな参入者としてポルトガル人が登場。

III. 日本銀貿易

*ポルトガル

ポルトガルのアジア貿易は、はじめインド銀を資金に東南アジアで麝香や香辛料など購入し、それを中国へと持ち込んで絹・陶磁器・などと交換し、ヨーロッパへと持ち帰った。しかし、日本との交渉が本格化すると、次第にポルトガルのアジア貿易は日本銀を軸として展開されるようになった。

【史料 6】リンスホーテン『東方案内記』

この国には幾つかの銀山があり、ポルトガル人が毎年その銀をシナに運んで行ってヤパン人の必要とする絹その他の品物と交換する。

【史料 7】「日本と中国に滞在するイエズス会士に対して書かれてきた様々な中傷に対する弁明書」(1598)『石見銀山関係編年史料綱目』

彼らは 50 ピコの絹で 1600 ドュカドの利益を得ていた。なぜならもし彼らが中国においておおよそ 1 ピコあたり 90 ドュカドで仕入れたなら、日本では 140 ドュカドで売れるからであり、そこから 10% を運搬料として支払い、売却に際して 3% の手数料を払うとしても 1 ピコあたり 25 ドュカドの利益があるからである。

***セーリス『日本渡航記』にみる日本向け商品**

『日本渡航記』はイギリス東インド会社貿易船隊司令官ジョン・セーリスの1613年際の来日記録
日本での販売商品と価格が記載 (参考資料)

水銀、朱、婦人顔料、銅版、小棒鉛、薄板鉛、細棒の錫、鋼鉄、麝香、山帰来、シナ刺繍用金糸、粉砂糖、
鷲絨、刺繍天鷲絨、琥珀織、繻子、縹子、模様物、撚らぬ絹、あらゆる種類のガラス盃、塩、葡萄酒盃、
広口盃、鍍金せる大型の鏡、白雲母、机上用帳簿、紙帳簿、鍋の施釉に用いる鉛、スペイン石鹼、小球の
琥珀、スペイン革、牛革、その他手袋用の皮革

III. 鉱山都市の成立

i 鉱山町の出現

金銀山開発ブームに伴い新たな都市として鉱山町が出現。

*** 鉱山町の特徴**

資源の存在が成立の前提条件

短期間に急激に発展し、なかには1万人を超える大都市に発展する場合もある

※越後沼金山の事例では、金山の活況に伴ってわずか3日間でほりこ3000人近くが流入。

【史料8】元和7年7月27日「堀直奇より堀主膳宛書状」

七月朔日より同三日迄二山へ入候ほりこ式千九百五拾人在之旨、存知之外成人数、弥々山能候ハんと令満
足候、金山ニ而自分之手廻も少々被致之由、得其意候

近世初期の鉱山の人口

国名・鉱山名	開発・最盛期の人口 (推定)
佐渡・相川金銀山	約3万5千~4万人 (慶長・元和年間)
但馬・生野銀山	約2万人 (慶長年間)
石見・大森銀山	不詳 (銀山柵内約1~2万人)
出羽・延沢銀山	約2万8千人 (寛永期)
出羽・院内銀山	約8千人 (慶長15~16年)
薩摩・長野金山	約2万人 (寛永19年)

出典：荻慎一郎『近世鉱山をささえた人びと』 山川出版社 2012年

秋田院内銀山の事例

「院内銀山記」によると、山仕26人、金子108人、惣手代60余人、山中惣寸方500余人、金子大工2300
余人、山留鍛冶留等の役人700余人、穿子油通ひ手・金通ひなどの者3300余人

「元和三年諸国之者調覚」

備前 402、伊勢 180、加州 104、近江 56、長門 14、豊後 24、信濃 11、越後 54、常陸 38、江戸 34 安芸
24、若狭 28、越前 58、丹後 21、丹波 17、但馬 6、備中 1、出雲 21、薩摩 5、豊前 3、三河 29 尾張 43、
美濃 17、駿河 20、越中 30、能登 37、播磨 35、上州 11、安房 3、紀伊 14、加賀 3、京 54 大坂 37、飛騨
1、堺 8、甲斐 18、大隅 1、肥後 2、肥前 2、筑前 3、周防 5、備後 1、因幡 6、河内 7、土佐 1、讃岐 1、
遠江 7、伊豆 9、相模 8、上総 6、下総 7、伊予 5、阿波 1、壱岐 5、対馬 5、日向 2、伯耆 5、宇都宮 5、那
須 17、日光 3、矢島 6、仙台 63、岩手山 10、田村 20、須賀川 2、二本松 3、福島 9、相馬 20、岩城 8、南
部 13、津軽 7、会津 10、白川 10、米沢 25、庄内 51、酒田 19、由理 58、最上 66

※鉱山への人口流入は全国的な規模

ii. 銀山町の形成

石見銀山の場合も灰吹法の導入以降急激な人口流入が見られた。天文8年(1539)には大水が出来し昆布山谷の住人1300余人が流失したという。→人口増加に伴う急激な宅地造成がもたらした災害なお、『銀山旧記』によると、慶長元和の最盛期には「士稼の人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余」と、人口は20万人、米の消費量だけで1日1500石にも達したという。

銀山町は「銀山六谷」と称し、本谷石銀・栃畑谷・昆布山・休谷・大谷・下河原の6地区にわかれ、屋敷に対しては都市税である地子銭は賦課された。

iii. 流入するモノと温泉津港

銀山町は金属の生産地であると同時に、多くの人口を抱える消費地でもあった。とくに米の需要は高く、周辺地域の米が大量に銀山に移入→「領内の上方」(山口、2008)

石見銀山では周辺地域で生産された米のほかに、温泉津港を通じて銀山で消費される生産資材や生活物資の移入が見られる。温泉津多田家文書には寛永期の「温泉津舟表水上諸役御算用状」などがあり、銀山への物資流入の実態がわかる。それによると、米・大豆・小豆・鉛・たばこなど。なかでも最大の商品は米であり、寛永11年(1634)閏7月には1ヶ月で1217駄1俵(1825.5石)が銀山入米として水揚げされている。これらの物資は温泉津問屋を通じて銀山の荷主へ納入。銀製錬に必要な木炭や鉛なども大量に移入。製錬炭は石見西部の三隅や益田、長州の宇田・惣郷・弥富などから移入された。鉛もまた寛永9年(1632)6月分で7290斤(4.3トン)が水揚げされた。→越中産鉛か?

【史料9】『中書家久公御上京日記』 ※天正3年(1575)

廿四日、しまつ屋の関とてありしかとも、亭主の書状を以安く通候、さてはねの町を打過、梁瀬のしゆく、猶行て大田といへる村、門脇対馬といへる人の所に立寄語らひ、さて行く行く石見のかな山清左衛門といへる者の所ニ一宿、夜入、加治木衆早崎助十郎・久保田弥三左衛門酒持来候、又一閑うりもてはやし候
廿五日、打立行に、肝付新介ニ行合候、加治木衆三十人ほど同行、さて西田の町を打過、湯津に著、其より小浜といえる宮の拝殿にやすらふところに、伊集院に居る大炊左衛門、酒・うり持参、さて湯に入候へは、喜入殿の舟に乗たる衆・秋目舟の衆・東郷の舟衆・しら八衆、各々ず々を持参り候

薩摩の島津家久は伊勢参りの帰途、銀山・温泉津に滞在。このとき家久を訪ねて薩摩・大隅の町中が挨拶に伺いに宿所に来る →九州南部地方との交流

参考文献

- 小葉田淳『金銀貿易史の研究』法政大学出版局 1976年
 村井章介『海から見た戦国日本—列島史から世界史へ』ちくま新書 1997年
 岸本美緒『東アジアの「近世」』<世界史リブレット> 山川出版社 1998年
 伊藤 幸司『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館 2002年
 荒野泰典「唐人町と東アジア海域世界—「倭寇の状況からの試論」」(『港町に生きる』シリーズ港町の世界史) 青木書店 2006年
 佐伯 弘次「博多商人神屋寿禎の実像」『境界からみた内と外』(『九州史学』創刊五〇周年記念論集・下) 岩田書院 2008年
 秋田茂・西村雄志編『デニス・フリン・グローバル化と銀』山川出版社 2010年
 岡美穂子『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』東京大学出版会 2010年

参考資料 村川堅固・尾崎義訳『セーリス日本渡航記』

日本にて売れるべき需要品ならびにそれらのマス(一マスは六ペンスに当たる)にての相場を貴下に通知しておくのは適當と思ふ。その細目はつぎのごとし。

いつさいの種類の広幅羅紗。すなわち黒、黄、褐、青、スタメット色各一間(二ヤードにつき)三、四より五〇〇マス

ただし、いずれも毛を短く刈れるものを要する。しからざればあまり売れない。前記諸色の細かいペイズで、^は霏のよくついたのは相当需要がある。絹糸交織のボラット Bora-tto の一重物または二重物、絹の呉絹服 綿 grograine、トルコ呉絹服綿、カムレット Chamblett、天鷲絨、繻子、琥珀織、緞子の枝や人物の刺繍あるものは需要の多い方である。一ヤード二シリング六ペンスから三シリング四ペンスぐらいで、それ以上でないオランダの羅紗、地紋布 Dyaper、緞子リネン、いつさいの色の糸、卓子掛、麝香はその重さだけの銀に代わる。グゼラットの織物。絵や花をもつて彩色した金唐革、細工の細かいほどよい。

彩色絵、あるいは淫乱なるもの、あるいは海陸の戦争譚に関するもの、大いなるものほどよい

	一より三〇〇マス
水銀、百カツチーにつき(一カツチーは一ポンド四分の一)	三より四〇〇〃
朱 百カツチー	三より六〇〇〃
婦人顔料	〇より二八〃
銅版、百二十五ポンドにつき	九〇より一〇〇〃
小棒鉛 百カツチーにつき	六〇より八八〃
薄板鉛、薄いほどよし、百ポンドにつき	〇より八〇〃
細棒の錫、百二十ポンドにつき	〇より三五〇〃
鉄	二より四〃
鋼鉄、百カツチーにつき	一より二〇〇〃
麝香一カツチーすなわち二〇オンス	一五〇より二〇〇〃
山帰来、百カツチーすなわち一ピクルにつき	〇より四〇マス
シナ刺繍用金糸、五節の紙一枚につき	〇より三〃
粉砂糖、シナの百カツチーにつき	五〇より六〇〃
天鷲絨、何色にても、長さ九ヤード物	一二〇より一三〃
刺繍天鷲絨、長さ九ヤード物	一八〇より二六〇〃
琥珀織、何色でも、上絹物二十四以上	三〇より四〇〃
繻子、九ヤード物	八〇より一〇〇〃
繻子、模様物	一二〇より一五〇〃
生糸、十二ポンド一カツチー	三〇より四〇〃
燃らぬ絹、二十八ポンドにつき	三五より四〇〃
燃りたる絹	二八より四〇〃
あらゆる種類のガラス盃、塩、葡萄酒盃、広口盃、鍍金せる大型の鏡、白雲母、机上用帳簿、紙帳簿、銅の施和に用いる鉛、スペイン石鹼一個一マスに売れる。	
小球の琥珀	一四〇より一六〇マス
スペイン革、牛革、その他手袋用の皮革	六以上八より九〃

シナ・カンダキン Candaquins	一五より一〇〃
シナ・カンダキン 黒色物	一〇より一五〃
蠟燭用の蠟、一〇〇カッチーにつき	一二〇より二五〇〃
蜂蜜、一ピクルにつき	〇より六〇〃
胡椒一ピクルにつき、市中品薄なら	〇より一〇〇〃
豆肉殻 Nuttmedges	需要なし
バロス産またはボルネオ産の樟脳、一ポンドにつき	一二五〇より四〇〇〃
ソロエル産のサンダース Sanders (白檀か)	〇より一〇〇〃
カラバク木 Collombacke wood もつとも重きもの、一ポンドにつき	一、二、三より五〇〇〃
象牙、大なるものほどより	四、五、六、七より八〇〇マス
犀角、一カッチーにつき	〇より三〃
鹿角、鍍金せるもの	三、四より五〇〇〃
明礬 Roach Allome、需要はなはだ多い	三より四〇〇〃

さて、日本に産する商品は次の通りである。

麻、はなはだ上等、百カッチー(百二十五ポンド)	六五より七〇マス
青色染料、ほとんどインヂョ同様に上等、まるい塊につくり、百個を一俵に荷造りしたもの	五〇より六〇〃
白色赤色染料、五十個を俵に包めるもの、マレーの一ガタングにつき	五より八マス
米、はなはだ白く上等、粉摺したもの一俵につき	〇より八〃
下等の米、一俵につき	〇より七〃
硫黄、はなはだ豊富、一ピルクにつき	〇より七〃
硝石、一カッチーにつき	〇より二〃
絹、一ピクルにつき	〇より一〇〃

金と銀とははなはだ豊富。金はバーバリー Barbary のチユカット duckett (Ducat) 貨ほどに上質である。けれどもはなはだ高価ゆえ、それで利益はほとんど見られまい。銀は棒形になっている。予は見本としてその一本を貴下に送る。予の判断では、もしそれを精錬しないでリアル貨に鋳造したら、インド諸島に流通するだらう。

第1表: 16世紀ポルトガル船積載品・価格表(中国から日本への積載品)

卸地名	商品名	数量	広東価格	マカオ価格	日本価格	利益率	特記
中国	白米	500~600ピコ	80両/ピコ	140~150両/ピコ	75~78%		
中国/マニラ	熟糸(上)	400~500ピコ	140両/ピコ	370~400両/ピコ	185%		最高級品は南京産
中国/マニラ	熟糸(並)	上に含む	55~60両/ピコ	100両/ピコ	70~82%		
中国/マニラ	アルカ糸	上に含む	40両/ピコ	94両/ピコ	135%		
中国/マニラ	絹織入り絹織物	1700~2100反	1.1~1.4両/反	2.5~3両/反	114~127%		1カネ老ノ104ピコで計算
中国	金(並)	3000~4000両	5.4両(錠)/両(錠)	7.8両/両	44%		
中国	金(上)	上に含む	6.8~7両/両	8.3両/両	26%		
中国	麝香	2ピコ	8両/カネ	14~15両/カネ	75~88%		
中国	麝香(上)	上に含む		26両/カネ	225%		
中国	鉛白	500ピコ	2.7両/ピコ	6.5~7両/ピコ	115~118%		
中国/マニラ	絹糸	200~300ピコ	7両/ピコ	16~18両/ピコ	125~157%		
中国/マニラ	カンガ(絹織物)	3000反	0.28両/反	0.5~0.54両/反	78~92%		
中国/マニラ	カンガ(絹織物)	上に含む		1.3両/ピコ			
中国/マニラ	カンガ(小)	上に含む	0.12両/反	0.23~0.24両/反	92~100%		
中国/マニラ	カンガ(色付き小)	上に含む	0.085両/反	0.16~0.17両/反	88~100%		
中国	水銀	150~200ピコ/300ピコ	40両/ピコ	90~92両/ピコ	125~130%		
中国	鉛	2000ピコ	3両/ピコ	6.4両/ピコ	113%		
マレー半島	錫	500~600ピコ		1~1.2両/ピコ	100%		
中国	山標米	20000片	0.8~1両/ピコ	4~6両/ピコ	100~200%		高級大皿は1枚1.5両
中国	陶磁器(上)	上に含む	1.2~1.5両/10片	到値の2~3倍			
中国	陶磁器(並)	上に含む	1.5マズ/10片				
中国	陶磁器(下)	上に含む	1レアル/10片				
中国	大黃	100ピコ	2.5両/ピコ	3両/ピコ	100%		
中国	甘草	150ピコ	2.5両/ピコ	9~10両/ピコ	200~300%		
中国	白砂糖	60~70ピコ	1.5~2両/ピコ	1.5両/ピコ	100~125%		日本人は黒砂糖を好む
中国	黒砂糖	150~200ピコ	0.4~0.6両/ピコ	4~6両/ピコ	900%		

出典: 岡本清子『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』東京大学出版会、2010年

第2表: 寛永8年(1631)温泉津湊における諸物資

月	項目	数量	役銀(兩錢)
1月	米水上役	79石9斗7升	213両5匁
	鏡山入米役	39駄	114匁
	万水上小役	492分5匁	
	合計	364石2斗4升9合	971両3分3匁
2月	米水上役	72駄2棧	218匁
	鏡山入米役	331両5分5匁	
	万水上小役	3分5匁	
	合計	1貫189分6厘	
3月	米水上役	652石5斗2升6合	1貫740目7匁
	大豆水上役	1石4斗7升6合	359分4匁
	粉水上役	658斤	9両8分7匁
	炉糟水上役	2010斤	15両1分2匁
	鏡山入米役	199駄	589匁
	万水上小役	26両7匁1厘	
	合計	2貫383両7分1匁	
4月	合計	欠	
5月	米水上役	176石2斗8升4合	470目9匁
	酒水上役	182樽	288匁
	炉糟水上役	780斤	5両9分2匁
	万水上小役	220目1厘	
	合計	856両2匁	
6月	米水上役	96石8斗8合	255両4分9匁
	酒水上役	79樽	118両5分
	鏡山入米役	58駄	174匁
	鏡山大豆役	2駄	8匁
	合計	320斤	25両4分
	万水上小役	85両4分2匁	
	合計	641両8分1匁	
7月	米水上役	481石9斗9升2合	1貫285両3分1匁
	大豆水上役	18石8斗5升6合	50目2分8匁
	小麦水上役	4石8斗3升8合	9両2分7匁
	大薯水上役	5石5升	6両7分4匁
	酒水上役	45樽	44両2分5匁
	鏡山入米役	174駄1棧	523匁
	鏡山入大豆役	11駄	33匁
	鏡山入小薯役	2駄	6匁
	万水上小役	47両5分7匁	
		合計	2貫3両4分2匁
8月	米水上役	1399石7斗2升7合3匁	817両9分4匁
	大豆水上役	52石5斗4升9合	140目3分3匁
	小麦水上役	5石7斗	75分9匁
	合計	297駄1棧	892匁
	鏡山入大豆役	25駄2棧	77匁
	万水上小役	180目5分6匁	
	合計	4貫886両5分2匁	
9月	米水上役	186石4斗7升6合	497両2分7匁
	大豆水上役	36石1斗8升9合	96両4分5匁
	小麦水上役	3斗	8分
	粉水上役	1344斤	20目1分8匁
	合計	1632斤	22両4匁
	炉糟水上役	12駄	369匁
	鏡山入大豆役	40目9分	
	合計	703両8分2匁	
10月	合計	欠	
11月	米水上役	325石1斗5升4合	867両8匁
	万水上小役	4956分32匁	
	合計	916両5分	
	炉糟水上役	1035斤	7両7分6匁
	万水上小役	54両2分5匁	
	合計	62両1厘	
12月	米水上役	86石8斗4合	230目9分5匁
	餅米鏡山入役	46駄2棧	140目
	万水上小役	18両3分	
	合計	389両2分5匁	

出典: 寛永8年「温泉津湊米水上御役御算用書」多田家文書